

## 熱さましの 使いかた

子どもが熱をだして、具合悪そうにしていると、まわりでみていてつらいものがあります。ぐったりしているようなら、熱さましの薬を使ってみてください。

でも、元気良くしているようなら、無理に使う必要はありません。また、熱さましを使ったあとに熱が下がっても、病気が良くなかったとはいえませんので、ご注意ください。



### 痛み止めとして使う

熱さましの飲み薬や坐薬には、たいがい「痛み止め」の働きがあります。

中耳炎、虫歯、けがなどの痛み、かぜのときの頭痛などは、急におきることが多いわけですが、手元に薬があればあわてなくてすみますね。

熱さましの薬があれば、とりあえず、痛み止めとして使ってみてください。(熱のないときでもかまいません。)その場の痛みがとれて、楽になるはずです。

ただし、病気そのものを治しているではありませんので、あとで小児科などを受診してください。(お腹の痛みには、熱さましの薬はききません。)



# 熱さましの使いかた



## 熱が出た！

熱が高いと脳がやられる、と思われがちですが、40℃ぐらいの熱があっても脳はやられませんから安心してください。



## 解熱薬は一時しのぎ

解熱薬は、熱によるつらさを軽くするための薬で、病気を治す薬ではありません。熱を下げることばかりに気をとられないようにしましょう。



## 坐薬か飲みぐすりか

効き目は同じです。吐く子には坐薬を、下痢のときや坐薬がきらいな子には飲みぐすりを。坐薬の解熱薬と飲みぐすりの解熱薬を同時に使ってはいけません。



## 冷やしていいですか？

冷えたタオルで頭を冷やす、そんなお母さんの姿が子どもの心をなごめます。冷却剤をおでこに貼るのも気持ちがいいでしょう。でも冷やしても熱はあまり下がらません。子どもが嫌がるときは無理に冷やさなくてもいいんです。

解熱薬は  
38.5℃以下では使わない  
6時間以上、あいだをあける



## 解熱薬の使いかた

- 38.5℃以上で、つらそうにしていたら使う。
- 高熱でも元気そななら使わなくてもいいのです。また、眠っている子を起こしてまで使う必要はありません。
- 一度使ったら、次に使うのは6時間以上あけましょう。

※以前、アスピリンがよく解熱剤として使われていましたが、インフルエンザや水痘のお子さんに使った時にライ症候群という重篤な副作用が起きることが分かりました。そのため、アスピリンは小児の解熱剤としては使わないことになりました。市販の医薬品も同様です。

現在、子どもに解熱剤として主に使用しているのは一般名「アセトアミノフェン」です（商品名「カロナール」「コカール」「アルピニー」「アンヒバ」など）。